

コーパスに見るテアル表現の意味用法と共起動詞

—日本語教育／学習の観点から—

安藤 節子

要 旨

テアル表現の提示法を探るために、意味用法および共起する動詞について、新聞および会話における使用実態を調査し、分析した。

・意味用法の傾向：「対象注目」が「動作注目」より多い。「不明」も一定数ある。

①新聞：対象注目73%、動作注目21%、不明6%

②会話：対象注目56%、動作注目33%、不明11%

・動詞とのコロケーション

③両コーパスで「書く」が最多で、「置く」がそれに次ぐ。その2語の対象注目の用法が新聞の総データの38.4%を占め、会話では44.8%である。

④無対他動詞が、延べで新聞の約80%、会話の約96%である。

⑤「生産」または「設置」の意味を持つ動詞が両コーパスで全体の80%前後を占め、少数ではあるが3番目の「発話・伝達・要求」は動作注目との共起が顕著である。

上記の結果が、運用を促す例文や場面の提示に役立つことが期待される。

【キーワード】 テアル表現、動作注目、対象注目、共起動詞、無対他動詞

1. 目的・背景

本稿の目的は、日本語の教育／学習において、運用力を促す例文や場面の提示／把握のために、テアル表現の使用実態を明らかにすることである。

テアル表現は、初級でも上級でも、教育／学習が容易ではない項目の1つである。蔡(2007:82)では、著者自身が自国で日本語を学んで来日した直後、授業で返却された宿題の「よくまとめてあります」というコメントをもらったが、「まとめることをした私」が褒められていることが理解できなかった、と述べている。

また、1990年代に日本語教師養成講座の「教育実習(初級)」で筆者が参与観察した際、指導項目に「テイル／テアル」があり、担当した受講生が「テイル＋有対自動詞」「テアル＋有対他動詞」で導入し、学習者と実習生がともに混乱したことが印象に残っている。

テアルについては、有対自他動詞と対応させながら、テイルとの比較で論じられることがよくあるが、テアル自体について考察した文献は、益岡(1987)、森田(1988、1989)など僅かである。本稿では、益岡、森田の先行研究を踏まえた上で、テアル表現の使用実態を調査し、その意味用法、および動詞とのコロケーションを分析、考察する。調査対象には、新聞と会話のコーパスを用いる。

2. 分析データ

分析対象としたデータは、次の通りである。

・文字データ¹⁾：

『CD-毎日新聞'07』毎日新聞社²⁾

・会話データ：

現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房

文字で記述された言語と、日常会話の言語ではテアル表現の使用が異なることが予想されるため、大きく2種類を選んだ。文字データを新聞としたのは、日本語学習者から到達目標として「新聞が読めること」がしばしば挙がるからである。会話データを両『職場編』としたのは、自然会話のコーパスは極めて限られていること、また共通語が中心になっていることからである。自然会話コーパスの、今後の構築が待たれる。

3. テアル表現の分類 ―意味用法から―

本章では、テアルの基本的特徴を考察し、それに基づいて実例进行分析する。

3.1 テアル表現の基本的特徴

益岡(1987)は、「テアル表現全体に共通して認められる意味的特徴は、意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現である、ということである」と述べている。テアル表現を、まず統語的観点から「対象ヲ」「対象ガ」の2つの類型に区別し、これは意味的観点からも意義ある分類としている。その上で、意味的特徴から4つの型に分け、意味領域の内容を明らかにしている。4つの型は、2つの意味領域「対象指向性(対象の状態存続が問題となり、対象をガ格に置く)」から「行為指向性(行為の結果だけでなく行為自体にも或る程度重きが置かれ、時の副詞と生起可能である)」の連続体であるとしている。

Alfonso(1966:901)は、テアル表現の2つの構文「戸が閉めてあります」「戸を閉めてあります」の相違について、前者は「戸(が)」と「あります」との呼応³⁾を述べているとし、後者の「戸(を)」は「閉めて」と呼応し、動作者の顕在化があると解説している。

本稿では、テアルの基本義を「行為による対象の変化の結果の状態」とし、意味用法の類型に「対象注目」と「動作注目」の2つを設定する。これは、益岡(1987)の2つの意味領域と基本的に同じであるが、教育/学習を意識し、テアル表現の傾向を簡明に把握することを目指すため、ここではそれ以上の細分化は行わない。

以上の方針で基本的特徴をまとめると表1のようになる。

1) 「文字データ」は適切な呼称ではないが、便宜上そう呼ぶ。「会話データ」の呼称も同様である。

2) 本研究は2008年に開始し、当時入手可能な最新のデータとして採用した。

3) 益岡(1987:222)は、この構文を存在文の一種としている。

表1 テアルの種類：「対象注目」「動作注目」の基本的特徴

項 目	対象注目	動作注目
構文	<u>N1</u> ガ V-てある 例 名前を書いてある	(N2ガ) <u>N1ヲ</u> V-てある 例 名前が書いてある
N1を支配する述語	「ある」 (例 名前がある)	「V-て」 (例 名前を書いて)
N1の意味役割	Vの対象	Vの対象
基本的意味	Vの対象に注目する 動作の結果が視覚的に確認される	Vの動作者と対象に注目する 動作結果の有効性を表すことが多い

表1の特徴より、まず格助詞を目安に抽出した例文を以下に挙げる。文末の出典は、(新)：新聞、(男)：男性のことば・職場編、(女)：女性のことば・職場編を表す。(下線は筆者による。)

<対象注目>

- (1) 息子がサンタの存在を疑った時、この目覚まし時計を私に見せて、近所の時計屋さんの店名が書いてあると言った日のことが、昨日のことのよう思い出される。
(新)
- (2) そー、なんか羽田空港限定の一、どら焼きで一、なんか、変などら、半分おりのどら焼きみたいなので、なんか、絵が画いてあるの。(男)

<動作注目> (~~~~：格助詞以外の判断要素/意図・意志を表す連用成分。本節後半、表2の説明で触れる。)

- (3) 折り詰め弁当などの食品にはってある消費期限や食品名を記したシールを、客側に読みやすいように手前側に見えるように置かず、わざわざ反対側の奥に向けて置いてあるのです(新)
- (4) あと、あれ、そこのかぎ'↑、{あー(0 1 D)}を置いてあるんですよ、ひとつ。
(男)

しかしながら、ガ格やヲ格は常に明示されているわけではなく、今回の調査データにおける明示化の実態は、以下の通りであった。(新聞総データ数628件、会話総データ数123件)

「対象注目」におけるガ格の明示：	新聞	191件/456件(41.9%)
	会話	14件/ 69件(20.3%)
「動作注目」におけるヲ格の明示：	新聞	46件/134件(34.3%)
	会話	2件/ 40件 (5.0%)

テアル表現の2つの類型の手掛かりとなるガ格とヲ格は明示されている方が少なく、特

にヲ格は、新聞で3分の1程度、会話では5%である。明示される比率が、相対的に新聞の方が高いのは、文字データだからであろう。

格助詞が現れないデータには、無助詞の他に次のような場合がある。(件数は未調査)

- ・対象を表す名詞が名詞修飾節の被修飾語となる場合(例文(5))
- ・対象を表す名詞自体が現れない場合(例文(6))
- ・対象を表す名詞に相当する箇所が引用のト/ツテを伴う場合(例文(7)(8))

(5)「社会保険事務所から、台帳に書いてある手書きの文字が判読できないので未納扱いにしたと言われた」=東京都内の男性公務員(57)(新)

(6)そして、いくらごみ拾い活動を行っても、翌日にはもう捨ててある。(新)

(7)あ、すでにメンバーのかたも、含むって書いてあるじゃん。(女)

(8)「中日の福留孝介選手などF Aで興味のある選手がいると球団には伝えてある」と新天地のチーム強化へ既に気合十分だった。(新)

以上を踏まえ、「対象注目」「動作注目」の使用実態の把握のため、基本的特徴(表1)に加えて、語用論的特徴による目安を設定した(表2)。益岡(1987)、森田(1988)、森田(1989)を参考に、筆者が「認識」「共起」「置換の可能性」「動作者の人称」の項目を立てたものである。

表2 「対象注目」「動作注目」の語用論的特徴

項 目		対象注目	動作注目
認識	客観性	状況の客観的叙述、眼前描写	
	意図性	意図的でない、意外性(+/-の意味) 発見(文頭に「あっ」の付加等)	動作者の意図を表すことがある 将来に備えて、準備の確認など
共起の傾向	取り立て		ハ (森田1989:96)
	時の副詞		例 10日くらい、開業以来等
	意図的表現		例 予め、ちゃんと、～ために等
	条件・理由の表現		例 カラ/バ/ガ等 + 対象…である
置換の可能性		Vテアル → アル	Vテアル → Vテオク
動作者の人称		他称 (森田1989:95-96)	自称・対称

例文(3)の _____ 箇所は、表2の意図的表現の例である。その他の例文を以下に挙げる。時の副詞(9)、取り立て(10)、条件・理由の表現(11)、動作者が自称(12)、動作者が他称(13)で、いずれも新聞からの例である。(以下、例文中の下線は筆者による。)

- (9) デビュー当時のものから自分の作品やステージで使った思い出の物まで取ってあったんですが、また作ればいやって。
- (10) 会見で赤城氏は、問題となった政治団体「赤城徳彦後援会」の過去3年間の領収書を張ったスクラップブックを示し、「領収書は逐一、これに添付してある」と強調した。
- (11) 濡らして使う前提なので、薄く絞りやすく織ってある。
- (12) 私の生涯について書いてありますので、さまざまな人にとって興味深いと思います。
- (13) 自由自在に解釈を重ねながらも恐ろしく緻密（ちみつ）なこの演奏は事前に設計図をひいてあるのだろうか。

3.2 分析結果

新聞コーパスのテアル表現の総データ数は628件、会話コーパスのテアル表現の総データ数は123件であるが、表1と表2の特徴を目安に分析した結果、新聞では「対象注目456件(73%)、動作注目134件(21%)」、会話では「対象注目69件(56%)、動作注目40件(33%)」であった。

文脈も併せて総合的に判断したが、新聞14件(6%)、会話8件(11%)のデータは、いずれとも判別しがたいものであった。テアル表現が2種の意味用法に截然と分かちがたいことの証左でもあろう⁴⁾。図1と図2は、データの割合をグラフで表したものである。

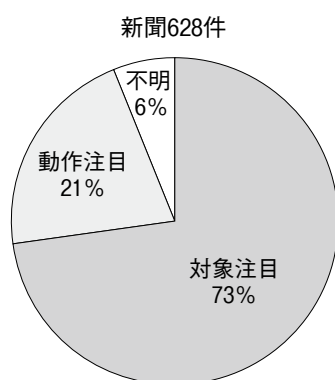


図1 新聞に見る意味用法別データ数

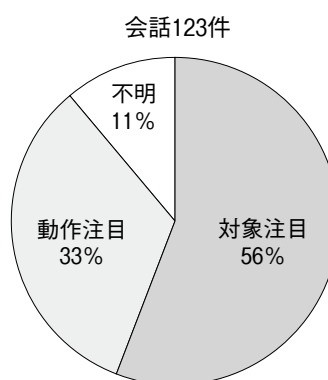


図2 会話に見る意味用法別データ数

図1、図2より、次の2点が確認される。

- ・テアルの意味用法は、新聞、会話とも「対象注目」が「動作注目」を上回る。
- ・「対象注目」「動作注目」の比率の開きは新聞の方が大きい。

新聞は多数に向けて発信する公的性格の強い媒体であるため、状況を客観的に叙述する

⁴⁾ 益岡(1987)では、意味的特徴からテアル表現を4つの型に分けているが、4つは明確に分けられるものとはせず、「連続体をなす」と述べている。

「対象注目」の比率が高くなると考えられる。また、会話場面で「動作注目」の比率が高いことは、森田(1989:96)の指摘、「行為主体(本稿の動作注目に相当)」では「動作者が話し手か聞き手となることが多い」と関連する。顔の見える個対個のやり取りが中心となる会話場面では、話し手/聞き手への意識が高まり、自称・対称が出やすくなるからであろう。

今回の調査結果では、新聞コーパスと会話コーパスにおける「動作注目」の比率の差が11%強に過ぎなかった(新聞21.3%、会話32.5%)が、会話の調査データが職場場面のものではなく、私的な会話場面のデータであれば、自称・対称の出現が増し、「動作注目」の比率がより高まるのではないかと推測される。

3.3 日本語教育/学習(1)

テアルを日本語教育で扱う際、初級用の日本語教材の多くで、2つの意味用法や場面を提示している。代表的な例では、『新文化初級日本語Ⅱ教師用指導手引き書』の「人の動作の結果として物が存在する状態を視覚的にとらえて描写する」と「準備が完了していることを表す」などである。前者は対象注目の用法であり、後者は動作注目の典型的な場面の1つが取りあげられている。初級教材では、対象注目のガ格は示されるが、動作注目のヲ格は見せずハで主題化して提示するのが一般的である。

教育の場において、特に初級においては「何を伝えるか」と同時に「何を伝えないか」も考慮すべきであり、その点からも、上記のようなテアルの動作注目の提示法が採られる根拠がある。

しかしながら、この解説の範囲では1. で述べたような上級者の課題に対応することは難しい。テアルは初級で提示して以降、授業で取りあげられる機会はあまりないと推測される。中級以降、格助詞ヲや動作注目の基本的意味用法も含めて、テアル表現を再度取りあげることによって、より適切な運用を促すことができるのではないだろうか。

4. テアルと動詞のコロケーション

本章では、テアルと動詞のコロケーションについて、意味用法(「対象注目」か「動作注目」か)との関連も併せて、新聞と会話の使用実態を、分析、考察する。

4.1 個別動詞とのコロケーション

本節では、テアルと共起する個々の異なり動詞(以下、個別動詞と呼ぶ)について、分析、考察する。個別動詞の数は、新聞コーパスで157語、会話コーパスで39語であった。

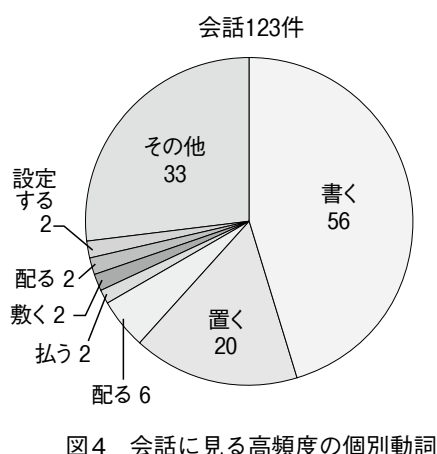
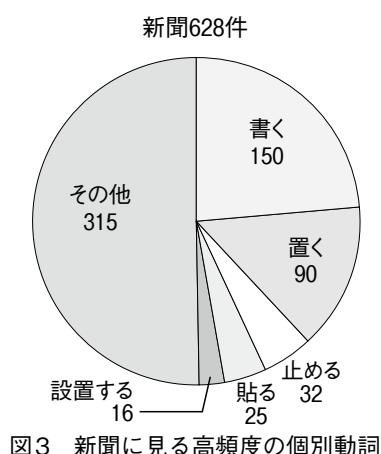
4.1.1 高頻度の個別動詞

新聞では、上位5語(書く⁵⁾、置く、止める、貼る、設置する)の延べ件数が313件である。

⁵⁾ 「書く」は「かく、画く」も含む。同様に、「置く」は「おく」を含み、「貼る」は「はる、張る」を、「止める」は「とめる、停める」を含む。

5つの個別動詞が総データ(628件)の49.8%を占め、その他152の個別動詞で50.2%である。(例文は3.1の(1)(3)(12)他)具体的には、書く150件、置く90、止める32、貼る25、設置する16と続き、6位以下は、飾る11件、記す9件、用意する7件となり、以下、記載する・表示する・伝えるなど11語が6件、かぶせる・しまうなど5語が5件、その他5語が4件、10語が3件、28語が2件、90語が1件ずつの出現であった。これをグラフで表したのが図3である。

会話では、上位3語(書く、置く、貼る)の延べ件数が82件で、総データ(123件)の66.7%を占め、その他それ以外の36の個別動詞の延べデータが33.3%である。(例文は3.1の(2)(4)他)4位以下は、払う・敷くなど4語が2件、それ以外の語は1件ずつのみの出現である。これをグラフで表したのが図4である。



新聞、会話とも、「書く」の件数が最も高く(新聞23.9%、会話45.5%)、「置く」がそれに次ぐ(新聞14.5%、会話16.3%)。

テアル表現と共起する個別動詞は極めて限られた数語が高頻度で使用され、延べ件数で高い比率を占めている使用実態が明らかになった。

なお、新聞では、「書く」の類義語が多く、「記す9件」「記載する6件」「明記する4件」「記入する3件」「大書きする2件」「(設計図、線を)引く2件」「綴る2件」「他3件」を加えると計181件で総データの約29%となる。会話では、異なり語数が多いこともあって、「書く」の類義語は「メモする1件」のみであったが、57件で総データの約46%となり、数値が若干あがる。

4.1.2 高頻度個別動詞と意味用法

本節では、4.1.1で明らかになった高頻度の個別動詞で、新聞と会話に共通する上位3語「書く」「置く」「貼る」の意味用法を観察する。調査結果は図5の通りである。

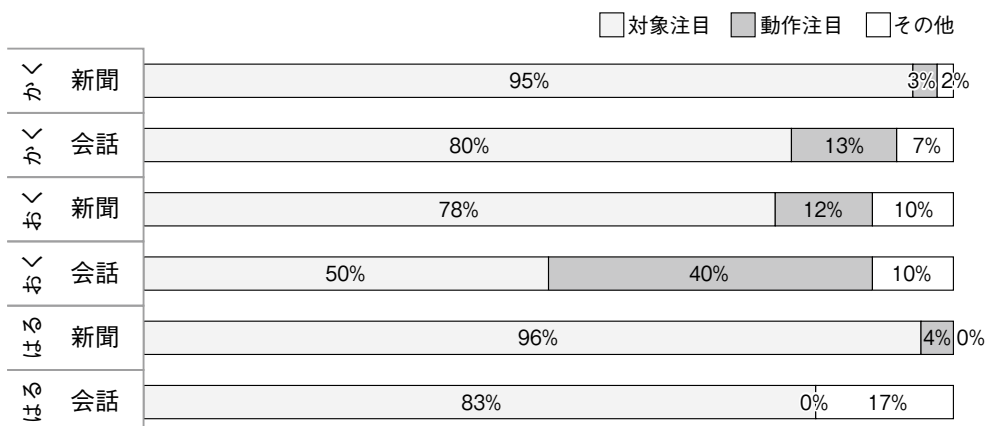


図5 「書く」「置く」「貼る」の意味用法

3.2の図1、図2と比べて、会話の「置く」以外は「対象注目」と「動作注目」の開きが拡大している。上位語では、「対象注目」の比率が高くなること、両コーパスにおいて特に「対象注目」の「書く」「貼る」にその傾向が著しいことが、本調査で明らかになった。

さらに、会話コーパスにおいては、総データの61.8%が「書く」と「置く」で占められ、総データの44.8%が「対象注目」の「書く」と「置く」であることが確認された。

新聞の同データは、「書く」「置く」が総データの38.4%を占め、総データの33.9%を「対象注目」の「書く」「置く」が占める。会話より値は低いが、新聞の異なり語数(157語)は会話の異なり語数(39語)より多いことを考慮すれば、「書く」「置く」の実際の使用は他の個別動詞と比べて、多く感じられるのではないだろうか。

会話の「置く」の動作注目の比率が他より高いことの意味は現在分析中である。動詞のアスペクトの意味に関わりがあるのだろうか。3語は広い意味で「動作による対象の変化」を表すが、「置く」は「動作自体」に、より重きを置きやすいとも解釈される。しかし、今回のデータに特有の現象である可能性も否定できず、それ以上の分析は今後の課題とする。

4.1.3 個別動詞と有対/無対他動詞

本稿で調査対象とした新聞および会話のコーパスでは、テアルと共起する動詞は全て他動詞であった。作例では、「市役所にはもう行ってある」「十分に休である」「夕べはたっぷり寝てある」などのように、行為を表す自動詞も共起可能であるが、本稿の調査では1件も見当たらなかった。他動詞の形態は、図3と図4にあがっている使用頻度の高い動詞では、「止める」を除くと全て無対他動詞である。

新聞の個別動詞157語のうち、有対他動詞は「止める」の他、「入れる」「伝える」「埋める」「かぶせる」「つける」「かける」「残す」「隠す」「備える」など42語で、それ以外は無対他動詞であった。会話は、個別動詞39語のうち、「とる」「開ける」「つける」「挙げる」

の4語が有対他動詞で、それ以外は無対他動詞であった。

異なり語の無対他動詞と有対他動詞は、新聞で「115対42」、会話で「35対4」となる。無対他動詞の延べ件数は、新聞で505件、会話で118件で、以下のようにまとめられる。

個別動詞の無対他動詞	：新聞で115語、即ち異なり語157語の73%
	会話で35語、即ち異なり語39語の89.7%
無対他動詞と共起する延べデータ	：新聞で505件、即ち総データ628件の80.4%
	会話で118件、即ち総データ123件の95.9%

以上より、調査データの範囲では、新聞と会話において、無対他動詞の使用が有対他動詞の使用を大きく上回り、会話ではその傾向がより顕著であった。

上記の結果で、上位に入っている有対他動詞は新聞の「とめる」1語(総データ中5.1%)であり、有対他動詞とテアル構文の共起は極めて限定されたものであることが確認された。(これについては、4.2.1で再度触れる。)

4.1.4 日本語教育/学習(2)

4.1.3の、テアルと無対他動詞との共起関係の結果から、1. で挙げた「有対/無対自他動詞とテイル/テアルとの対応」による提示法は、日常の言語使用の実態に必ずしも即していないことが明らかになった。状況や場面の設定に無理が生じ、それが混乱を招く要因の1つになったのではないだろうか。教材を作成する際は、指導に関するさまざまな要件や意図を踏まえて提示法が決定されていくが⁶⁾、どの提示法を採用にしても、教授者が実態を把握しておくことは有用であろう。

4.2 意味分類別動詞とのコロケーション

本研究では、データの分析にあたり、すべての共起動詞に意味分類別情報を付加した。下記の8つの意味分類を設定したが、分類は早津(1989)⁷⁾を基準とした。

[変化(形状など)] 形状、質などを変える働きかけをする。割る、片付ける、煮る、
[生産] 物を作りだす働きかけをする。書く、作る、建てる、編む、刷る、

⁶⁾ 市販の初級教材をいくつか調べると、テアルの提示、解説はさまざまである。

- ・テイル/テアルを一切対応させないもの(『新文化初級日本語』L.32、L.36)
- ・テイル/テアルと有対自/対他動詞の対応は、本文や練習にはないが、文法解説のNotesで補足的に説明したもの(『みんなの日本語』L.30)
- ・テイル/テアルと有対自/対他動詞の対応は、本文や練習にはないが、文法解説の冒頭で意味的相違を解説したもの(『大地』L.31)
- ・テイル/テアルと有対自/対他動詞を対応させて解説し、その練習も行うもの(“A Course in Modern Japanese” L.15)

⁷⁾ 早津(1989)：有対他動詞と無対他動詞の意味的分布状況を、大きく5分類し、それを14の下位グループに分類している。

[設置] 対象の所在場所を変える働きかけをする。置く、貼る、設置する、入れる、
[発話・伝達・要求] 相手に何かを言ったり伝えたり要求したりする。言う、説明する、
[思考・判断・知覚] 思考・判断・認識・知覚活動を表す。考える、信じる、感じる、
[追求・探求] 何かを追求、達成、成就する。探す、選ぶ、数える、
その他[授受](預ける等)、[打撃・接触・利用](押さえる等)

上記の[変化]の動詞は、角田(2007:6)が「動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす」とする、他動性の高い変化動詞である。[生産]は出現という変化であり、[設置]は位置的变化である。[変化]は典型的変化動詞、[生産][設置]は広義の変化動詞と言える。

意味分類別情報を付加する場合、多義語は文脈によって意味分類を判断した。例えば、(14)の「取る」は「取り置く」「保存する」などと同じ設置に分類した。

(14)「ママにあげる」と手に持っていたのは「おなかが治ったら食べようね」と楽しみに取ってあったチョコレートでした。(新)

4.2.1 使用頻度の高い個別動詞の意味分類

4.1で考察した、テアルと共起する頻度の高い個別動詞を、意味分類別に見ると次のようになる。()内はデータ件数。

- <新聞> 生産：書く(150)
設置：置く(90)、止める⁸⁾(32)、貼る(25)、設置する(16)
<会話> 生産：書く(56)
設置：置く(20)、貼る(6)

上位語は全て「生産」もしくは「設置」の動詞であった。(総データでは、この2つの意味分類が、新聞で85%、会話で78%を占める。)

一方、典型的変化動詞「変化」(対象に動作が及んで形状・質に変化を起こす(割る、壊す、焼く等))は、総データで両コーパスとも7%のみであった。典型的変化動詞は有対他動詞が多く、4.1.3で得た結果「テアルと共起する有対他動詞は極めて限定されたものである」とも符合する。

4.2.2 動作注目の動詞の意味分類

テアルと共起する主たる意味分類別動詞の意味用法については、分析中であるが、3.2

⁸⁾ 「止める」は、乗り物を場所に止め置くの用法。

例 昨年末、出先の歩道で、自転車が店寄りに止めてあった。(新)

の図1、図2および4.1の図5から、「対象注目」の割合が一定以上を占めると推測される。

ここでは「発話・伝達・要求」の意味分類別動詞と「動作注目」の関係に注目したい。「発話・伝達・要求」の総データ数は、全体からすると少ないが、新聞では「生産」「設置」「変化」に次いでおり(18件)、会話では「生産」「設置」「変化」「授受」に次ぐ(4件)。個々のデータを観察すると「動作注目」が多い。「発話・伝達・要求」の動詞で動作注目の意味用法の実例には、例えば次のようなものがある。(下記の他、3.1の(8)もこの一例である。)

- (15) ヒル国務次官補も「日本との関係を改善することも重要だと北朝鮮に伝えてある」
と言っている。(新)
- (16) 既に訂正の事実、森元首相に報告してあるというが、森元首相から特にコメントはなかったという。(新)
- (17) でー、あの一、[職業名]からその、一回その、はり出してー、はがしたやつをー、
なんか後で見たいなと思う時あるかもしれないとゆうことでー、[名字]さんにー、
今、その一、データで打ち込んでもらってー、あの一、周知みたいな感じのファ
イルに、まとめてもらうようには指示してあります。(男)
- (18) それからねー、安全意識の高揚、それから再配置に伴う安全指導、今いった、ま
ー2点なんだよねー、えー、こーゆーのを、えー、特に、強調してゆってありま
す、とゆうことです。(男)

「発話・伝達・要求」のデータ件数は表3の通りである。

表3 「発話・伝達・要求」の意味分類に属する動詞

	対象(合計中%)	動作(合計中%)	不明(合計中%)	合計(総データ中%)
新聞	5 (27.8%)	12 (66.7%)	1 (5.6%)	18 (2.9%)
会話	0 (0%)	4 (100%)	0 (0%)	4 (3.3%)

新聞：伝える6、言う3、説明する2、知らせる/アドバイスする/明示する/報告する等
(伝える/言う/知らせる/アドバイスする/報告する：「動作注目」のみ)

会話：連絡する/話す/ゆう(言う)/指示する/各1 (全て「動作注目」)

「発話・伝達・要求」のアスペクトは「継続/活動」の動詞であることから、「動作注目」の方が多いのは当然でもあり、表1の「てある」の基本的意味である、「動作注目：動作の結果に有効性がある」を具体的に検証する結果となった。今回の調査によって、「発話・伝達・要求」の意味分類を特定することができた。

5. まとめ

本稿では、今回調査した新聞コーパスと会話コーパスにおける、「てある」構文について、以下のような使用実態が明らかになった。

- ・「対象注目」が「動作注目」より多い(新聞:73%と21%、会話56%と33%)。しかし、両者は連続体をなすものであり、いずれとも判別し難いデータもある。
- ・テアル表現と共起する個別動詞は、両コーパスとも、「対象注目」の「書く」が最多で、「対象注目」の「置く」がそれに次ぐ。
- ・数語の個別動詞で総データの多くを占める。新聞では6語(書く、置く、止める、貼る、設置する)で49.8%を、会話では3語(書く、置く、貼る)で66.7%を占める。
- ・共起頻度の高い動詞は、「止める」を除くと、ほとんどが無対他動詞である。異なり語では新聞73%、会話89.7%であり、総データでは新聞80.4%、会話95.9%であった。
- ・テアル表現と共起する動詞の意味分類別動詞は、両コーパスで「生産」と「設置」が多く、総データで、新聞85%、会話78%である。3番目は「変化」であった。
- ・「発話・伝達・要求」の意味分類別動詞が、新聞で4番目、会話で5番目に多く、「動作注目」の用法に集中することが判明した。

コーパス分析によって、以上のようなテアル表現の使用実態が明らかになった。日本語教育/学習の場で、より適切な運用を促すための導入や場面・例文の提示に資することができれば幸いである。

以上

謝辞

本稿は、ATJセミナー2009(於シカゴ)での口頭発表「『てある』と動詞のコロケーション」、および第16回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム(2011年於タリン)での口頭発表「コーパスに見る『てある』の意味と語用—日本語教育の観点から—」を統合、執筆したものである。会場で貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

参考文献

- 蔡葶葳(2007)「『テアル』の意味機能に関する一考察」『日本語教育方法研究会誌』 vol.14 No.1, pp.82-83. 日本語教育方法研究会
- 角田太作(2007)「他動性の研究の概略」『他動性の通言語的研究』くろしお出版 pp.3-11
- 早津美恵子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』第16巻8号, pp.353-364. 計量国語学会
- 益岡隆志(1987)「他動表現のアスペクト」『命題の文法—日本語文法序説』第4部第1章 pp.219-235. くろしお出版
- 益岡隆志(1992)『基礎日本語文法—改定版—』p.112. くろしお出版
- 森田良行(1988)『日本語の類意表現』pp.123-161. 創拓社
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』pp.94-97. 角川書店
- Anthony Alfonso(1966)“Japanese Language Patterns” Sophia Univ. L.L. Center of Applied Linguistics (pp.900-905).

参考資料

文化外国語専門学校 (2000)『新文化初級日本語Ⅱ』 凡人社

文化外国語専門学校 (2000)『新文化初級日本語Ⅱ教師用指導手引き書』 凡人社 p.157

スリーエーネットワーク編 (1998)『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』 スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編 (1998)『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳・文法解説書英語版』 スリーエーネットワーク

山崎佳子・石井怜子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子 (2009)『日本語初級2大地 メインテキスト』 スリーエーネットワーク

山崎佳子・石井怜子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子 (2010)『日本語初級2大地 文型説明と翻訳<英語版>』 スリーエーネットワーク

名古屋大学日本語教育研究グループ (2002) “A Course in Modern Japanese vol.2” 名古屋大学出版会

調査コーパス

毎日新聞社『CD-毎日新聞'07』 毎日新聞社

現代日本語研究会編 (1997)『女性のことば・職場編』 ひつじ書房

現代日本語研究会編 (2002)『男性のことば・職場編』 ひつじ書房